

主 題：敵であるサタンの敗北 8**聖書箇所：ヨハネの黙示録 13章11-18節**

今日は、黙示録13章の11節からみことばを学んでいきます。

神はヨハネに、創造の初めから患難時代の終わりまでの登場人物を明らかにしました。12章では、ひとりの女が登場しました。イスラエルのことでした。大きな赤い竜が出て来ます。サタンのことです。男の子も登場しました。これはキリストのことでした。こうして私たちは、様々な登場人物を見て来たのです。その後、天から落とされたサタンの話があり、竜に迫害される女のことが書かれていて、そして、13章になると、海からの獣のことが記されています。そして、今日見る箇所ですが、「地からの獣」について書かれています。このような登場人物、それらを12章から学んで来たわけです。

私たちはすでに、「海からの獣」について13：1-10を通して学びました。未来のこと、将来のことです。「海からの獣」が登場することを聖書は教えています。この獣はいったいだれであったのか？思い出してください。これは「偽キリスト」のことでした。「自分こそがキリスト、救世主だ」と言って人々を惑わす存在、それが「海からの獣」として記されていました。少し復習しましょう。

○「海からの獣」について**1. この獣は「偽キリスト」である**

この「偽キリスト」は世の中に「平和をもたらす」ことを約束するものでした。6：2にも「白い馬とその乗り手」のことが書かれていました。つまり、「私は世界に平和をもたらすのだ」と言って人々を惑わすのです。あたかも、彼が平和の使者であるかのように…。今まさに、世の中は平和を欲する世の中になっています。この人物が現われ、この人物が平和を約束します。でも、もちろん、それは偽りの平和であり、そして、ひと時の平和であることはすでに私たちは学んで来ました。

また、この偽キリストはイスラエルと契約を結ぶことが、旧約聖書ダニエル書9：27に書かれていました。「彼は一週の間、多くの者と堅い契約を結び、半週の間、いけにえとささげ物をやめさせる。荒らす忌むべき者が翼に現れる。ついに、定められた絶滅が、荒らす者の上にふりかかる。」、イスラエルに神殿の建設といけにえをささげることを許すというものです。その結果、イスラエルの人たちは大いに喜ぶでしょう。しかし、それは長く続きません。3年半が過ぎ去った時に、彼はその契約を破り、いけにえを止めさせるということが記されていました。それだけではありません。彼は自らが「神である」と主張すると、そのことが旧約聖書の中にも記されています。

もう一つ、この偽キリストは世界のリーダーとして力を持っている存在であって、悪魔や悪霊たちの力を受けている人物であると言います。聖書が教えることは、そのような人物が必ず登場して来ることです。世界的なリーダーです。でも、その力というのは悪魔から来ていると、そのように聖書が教えています。

2. また、この獣は「ローマ帝国」のことでもある

もちろん、この海からの獣は偽キリストのことと、みことばを通して見ることはできるのですが、同時に、私たちはこれはローマ帝国のことでもあると学んで来ました。そこで13：2には、そのローマ帝国の特徴が三つの動物を用いて表わされていました。ひょう、熊、獅子（ライオン）と、その特徴が記されています。このローマ帝国が再建された時には10人の王、10人のリーダーたちがいるようです。将来のことですから。恐らく、彼らは政治的にも、また、軍事的にも大変大きな力を持っているでしょう。そんな中、偽キリストが影響力を拡大し、このローマ帝国全体を、また、全世界を支配するようになって行きます。その際、三人の王が失墜するということが、そのことをすでに見て来ました。この復活したローマ帝国は神に逆らい続けます。そして、神の御国、千年王国が来ないようにと妨げ続けると、これはすでに学んで来たことです。

☆「地からの獣」について学ぶ

今日見ていくのは11節から、二匹目の獣のことです。しかも、この獣は海ではなくて「地から上がって来る獣」と記されています。13：11「また、私は見た。もう一匹の獣が地から上って来た。それには小羊のような二本の角があり、竜のようにものを言った。」、まず、見ていただきたいのは「また、私は見た。」という表現です。私たちは何度もこのことばを見て来ました。ヨハネが新しい幻を見た時に、このような表現を使っています。ですから、12：1から幻を見て来たヨハネは、さらに、新しい出来事、「地からの獣」を目撃したと、そのことを記しているのです。ヨハネは新しい幻をここで見るのです。

A. その正体

この獣について、その正体、いったいだれのことなのかを見ていきましょう。黙示録 16 : 13 を見てください。「また、私は竜の口と、獣の口と、にせ預言者の口とから、かえるような汚れた霊どもが三つ出て来るのを見た。」、「竜の口、獣の口、にせ預言者の口」と書かれています。すでに、私たちは竜はサタンのことであると学びました。海から上がって来る獣、つまり、偽キリストのことを学んで来ました。その後「にせ預言者」という存在が記されています。その後、19 : 20 をご覧ください。「すると、獣は捕らえられた。また、獣の前でしるしを行い、それによって獣の刻印を受けた人々と獣の像を拝む人々とを惑わしたあのにせ預言者も、彼と一しょに捕らえられた。そして、このふたりは、硫黄の燃えている火の池に、生きたままで投げ込まれた。」と書かれています。今から私たちは見ていきますが、この「地から上って来る一匹の獣」とは、このような箇所を見ると、これは「にせ預言者」のことであると結論を先に言います。このことはこの後見ていくと、より鮮明になっていきます。

◎「にせ預言者について」、ヨハネはもう少し詳細な情報を提供してくれています。

1) 彼は偽キリスト同様に「人」である

11 節には「もう一匹の」と書かれています。ここで使われているギリシャ語は「同じ種類のもう一つのもの」という意味があります。つまり、偽キリストと同じ種類である別の一匹ということです。偽キリストは人でした。彼と同じ種類である別の一匹というのは、つまり、このにせ預言者も「人」であるということを教えています。

2) 彼は偽キリストよりも劣る存在

彼は「地から上って来た」と記されています。これについて、それはどういう意味なのか？この獣は天からではなくて地から来た被造物であり、天から下った偽キリストに比べて劣る存在であるということです。実は、レオン・モーリスという神学者は「この起源がよく知られた地にあるので、海から上がって来る最初の獣ほど神秘的ではない。最初の獣ほど恐ろしくない。」と説明します。天から下って来るというのは非常に神秘的な存在だが、私たちがよく知っているこの地上、この地から上って来るというのは、最初の獣と比べて神秘的でもないし、また、恐ろしくもないということです。

また、マスターズ神学校のトーマス先生は、スチュアート先生の書かれた黙示録講解から引用して次のように説明しています。「古代の人々は、この地のいかなる生き物も、底知れぬ所からの獣と大きさにおいて比較することができなと考えた。そういうわけで、この地から上って来たということは、第一と比べて第二の獣が力において劣っていることを表わしている。」と。いずれにしろ、この「地から上って来た」ということは、それを読んだ人は、海から上って来た獣に比べて劣るものだと、そのように受け取ったということです。

B. その働き 11b-14a 節

さて、このにせ預言者、地から上って来る獣の働きが 11-14 節に書かれています。

1. 偽キリストの働きを助ける

前後しますが、12 節を見てください。「この獣は、最初の獣が持っているすべての権威をその獣の前で働かせた。また、地と地に住む人々に、致命的な傷の直った最初の獣を拝ませた。」、注目していただきたいのは「拝ませた」ということばです。ですから、この二匹目の獣、にせ預言者はいろんなことをしてその第一匹目の獣である偽キリストを拝むように働くということです。これが彼の目的なのです。まさに、彼は偽キリストに仕えるような、人々が偽キリストを神として崇めるように働きを為す存在であると言うのです。ですから、にせ預言者は偽キリストの働きを助ける存在です。

2. 人々を惑わす

11 節の後半に「…それには小羊のような二本の角があり、竜のようにものを言った。」とあります。つまり、この獣であるにせ偽預言者は、小羊のなりをして来るということです。なぜ、そんななりをしてやって来るのか？小羊を見たときだれもそれを恐れませんが、可愛いと思うし、関心を抱くし、歓迎します。ですから、このにせ預言者は非常に魅力的な存在、人々の心を捉えるような存在だと言うのです。しかし、それはあくまでも外見上のことで、その内側は悪に満ちあふれていることがこの 11 節に書かれています。身なりは確かに、小羊のような二本の角を持っていますが、内側は「竜のようだ」、「竜のようにものを言った。」と書かれています。彼は竜、すなわち、サタンのようにものを言ったと言うのです。サタンのように、また、「サタンとしてものを言った」とも訳せます。

どのようにしてこのにせ預言者は人々を惑わすのでしょうか？

1) ことばによる惑わし 11 節

このにせ預言者は、ことばによって人々に惑わしを与えるのです。彼が仕える偽キリストも、また、彼らが仕えるサタンも、嘘においては長けています。その歴史において、私たちが見て来たことは、い

つも彼らは騙し続けることです。イエスがサタンの誘惑をお受けになったとき、サタンはこのように言いました。マタイ4：8、9「:8 今度は悪魔は、イエスを非常に高い山に連れて行き、この世のすべての国々とその栄華を見せて、:9 言った。「もしひれ伏して私を拝むなら、これを全部あなたに差し上げましょう。」と。つまり、サタンがすることはいつも変わっていません。彼は真理を語りません。彼は人々が真理から外れるようにと働くのです。ということは、当然、このサタンの力を受けているにせ預言者も、同じようなことを、この先、患難時代の終わりになって為すのです。恐らく、サタンはこのにせ預言者を通して、人々が欲しているものを提供することを約束するのでしょうか。なぜ、サタンはそのようなこと彼を使って為すのか？人々の心がしっかりとサタンと結びつき、決して離れることがないように、人々の心をサタンに引き留めて置くためにそのような働きを為すのでしょうか。

恐らく、このことばによって、それを聞いた人々は、この偽キリスト、彼こそがすべての問題の解決であり、救世主であるかのように語り続けていくのでしょうか。だから、にせ預言者は、この偽キリストがいかにすばらしい存在であるか、いかに彼が私たち人間の希望であるのか、そういうことを話し続けていくのでしょうか。こうして彼は人々を惑わし続けていきます。

にせ預言者が語ることを人々が信じるために、人々からの信用や信頼を勝ち取る必要があります。だから、彼は狼ではなくて羊のなりをしてやって来るのです。思い出しませんか？「にせ預言者たちに気をつけなさい。」と教えられたイエスの教えを…。マタイ7：15「にせ預言者たちに気をつけなさい。彼らは羊のなりをしてやって来るが、うちは貪欲な狼です。」、見かけだけで判断してはいけぬ、そのようににせ預言者たちがどの時代にもいるからです。でも、この特別なにせ預言者というのは、偽キリストを人々が崇拝するために惑わし続ける存在です。でも、同じように彼は羊のなりをしてやって来るのです。しかし、実際は、彼は貪欲な狼であると言うのです。

カルビン大学の新約学の教授であったウィリアム・ヘンドリックセン先生はこのにせ預言者に関して、「真理を装ったサタンの偽りそのものである。」と語っています。先にも話したように、このサタン、サタンに仕える者たち、特に、このような偽キリストやにせ預言者という存在は、その特徴を見事に引き継いでいます。「うそ」です。騙し続けるのです。決して、人間が真理に至らないようにと。まさに、サタンの代弁者です。そうして人々の関心を巧みにつかんで彼らを惑わし続けると言います。間違っても、彼らが真理に至らないように、救いに至らないようにと騙し続けていくのです。この偽キリストこそが人類の救世主であると、そうして、真の神に決して心を開かないようにと騙し続けていくと。騙すことはサタンの十八番（おはこ）です。このような働きを継続すると、そのことを私たちはここで見る事ができます。

2) 行いによる惑わし 12-15節

また同時に、騙すのはことばだけによるものではありません。実際、行いによって惑わし続けていきます。12-15節にそのことが書かれています。13：12「この獣は、最初の獣が持っているすべての権威をその獣の前で働かせた。…」、このにせ預言者は行いによっても人々を惑わし過ちへと誘惑して行く。それはこのにせ預言者に、偽キリストが持つ権威が与えられたからだ、そのようにこの12節は教えています。この獣、つまり、にせ預言者は、最初の獣である偽キリストが持っているすべての権威を、偽キリストの前で働かせたと言います。ということは、このにせ預言者も偽キリストの権威を受けているということです。

そして、このにせ預言者は自分に与えられている権威を顕示し、また、能力を誇示し続けるために、人々があっと驚くような様々な不思議や奇蹟をサタンの力によって行い続けるのです。そして、人々を惑わし続けると言います。14節にも「また、あの獣の前で行うことを許されたしをもつて地上に住む人々を惑わし、剣の傷を受けながらもなお生き返ったあの獣の像を造るように、地上に住む人々に命じた。」とあります。ですから、こういうことです。この偽預言者は様々な奇蹟やいろんな出来事を通して人々を惑わし続けていくのです。ことばで惑わすだけでなく、いろんな行いをもって人々を惑わすのです。なぜなら、この人物はそのような権威を偽キリストからいただいたからだ、そのようにヨハネが教えるのです。

*** その例 : どのような惑わしを為すのか？**

(1) 死んだと思われた偽キリストの生き返り

12節の後半に「また、地と地に住む人々に、致命的な傷の直った最初の獣を拝ませた。」とあります。まず一つ目は「死んだと思われた偽キリストのよみがえり」です。このことについてはすでに学んで来たので、その時間は取りませんが、みな死んだと思っていた偽キリストがその死からよみがえりということ、このことによって人々の心をこの偽キリストに引き付けるのです。主イエス・キリストは十字架で亡くなった後、約束通り、その三日後に死からよみがえって来た。もし、イエス・キリストが今もあ

の納められた墓の中にいるのなら、彼は嘘つきであったと、そのことが明らかにされます。しかし、イエス・キリストはその死から敢然とよみがえって来られたことによって、ご自分が言われていたことがすべて真実であること、彼が神であり、人となられたこと、そして、真の救い主であるということを実証されました。皆さんにぜひ気付いていただきたいのは、サタンも自分がこの世の神として君臨したいのです。ですから、非常に紛らわしいこと、真理とよく似たことを行って、そして、惑わすということです。この偽キリストが死んだように見えた、でも、そこからよみがえって来た。すでに見たように、恐らく、彼は死んでいなかったのでしょう。惑わすことなどサタンにとってお手のものです。死んだように見せかけ、でも、そこからよみがえって来る、そのような不思議なわざを、しるしをこのにせ預言者は行うのです。

(2) 超自然的な奇蹟 13-15節

・火を天から地に降らせるような大きなしるし 13節

「また、人々の前で、火を天から地に降らせるような大きなしるしを行った。」、超自然的な奇蹟を行うのです。この「行った」と書かれてある動詞は現在形です。ですから、この人物は継続してこのような超自然的なことを行ない続けるのでしょう。それは「火を天から地に降らせるような大きなしるし」です。あのエリヤのときに、神が天から火を降らせて、この方こそが真の神であるということを実証された。神が為されるみわざと非常に類似することを行うのです。先ほども言いました。いずれにしろ、神が為されたことをこのにせ預言者もやってみせるのです。そうして人々を惑わすのです。だから、イエスがマタイ24:24でこのように言われています。「にせキリスト、にせ預言者たちが現れて、できれば選民をも惑わそうとして、大きなしるしや不思議なことをして見せます。」と。イエスが言われた通り、偽キリストやにせ預言者たちはこうして人々を惑わし続けるのです。

・あの獣の前で行うことを許されたしるし 14節

「また、あの獣の前で行うことを許されたしるしをもって地上に住む人々を惑わし、…」、偽キリストが行って来た様々な不思議なわざをもって人々を惑わし続けることが言われています。

・その獣の像に息を吹き込んで、獣の像がもの言うことさえもできるようにし 15節

このにせ預言者は偽キリストの像を造るように命令を与えます。そのことは14節に書かれています。「…剣の傷を受けながらもなお生き返ったあの獣の像を造るように、地上に住む人々に命じた。」と。にせ預言者は様々なことをもって人々を惑わし続け、そして、人々にあの偽キリスト、死からよみがえって来た彼らは言いますが、その像を造れという命令を発するわけです。そして、その造られた像に対してこのにせ預言者がすることが15節に書かれています。「それから、その獣の像に息を吹き込んで、獣の像がもの言うことさえもできるようにし、…」、なぜ、そのようなことをするのか？それによってこの造られた像、偶像がものを言い人々がこの偶像を崇拝するためにです。これについても思い出しませんか？神が人間を造られたときに、神が私たちにいのちの息を吹き込んで私たち人間は生き物になりました。非常によく似たこと、同じようなことをするのです。像に息を吹きかけたら像がものを言ったと。像が生き物のようになる。こうして世界を騙すというのです。

非常に巧妙でしょう。サタンはどうすれば人間を騙し続けることができるのかをよく知っています。にせ預言者が息を吹きかけるとこの造った像がものを言い始めるというのです。今の私たちは、そのようなことが可能だということを知っています。先日、ソフトバンクに行くときロボットが喋っていました。益々人間に近くなって来ています。ですから、そのようなトリックを為すことは十分に可能です。ヨハネの時代にすると驚きかもしれません。でも、少なくとも、こうしてこの箇所が私たちに教えてくれるのは、こういう超自然的なこと、そのように人々には見えるのですが、それらを通して「惑わす」ということです。だから、サタンはこのような不思議なことを常に用いているのです。

・旧約においても

皆さん、思い出してください。モーセとアロンがエジプトのパロのところに行った時に、イスラエルの民をエジプトから解放するようという神のメッセージを携えて行きました。その時に、アロンが持っていたその杖をパロとその家臣の前に投げたとき、その杖はどうなりましたか？蛇になりました。「:9 パロがあなたがたに、『おまえたちの不思議を行え』と言うとき、あなたはアロンに、『その杖を取って、パロの前に投げよ』と言わなければならない。それは蛇になる。」:10 モーセとアロンはパロのところに行き、【主】が命じられたとおりに行った。アロンが自分の杖をパロとその家臣たちの前に投げたとき、それは蛇になった。:11 そこで、パロも知恵のある者と呪術者を呼び寄せた。これらのエジプトの呪術師たちもまた彼らの秘術を使って、同じことをした。:12 彼らがめいめい自分の杖を投げると、それが蛇になった。しかしアロンの杖は彼らの杖のみこんだ。」、出エジプト記7章9-12節でこのように教えています。ところで、モーセとアロンに逆らったこの呪術者たちですが、パウロは彼らの名前をヤンネとヤンブレと記しています。

Ⅱテモテ3：8「また、こういう人々は、ちょうどヤンネとヤンブレがモーセに逆らったように、真理に逆らうのです。彼らは知性の腐った、信仰の失格者です。」と。こういう奇蹟をもって人々を惑わすということ、サタン手法です。旧約の時代にも為されていました。

・新約においても

また、新約の時代を見ても、パウロがそのように私たちに警告を発しています。「不法の人の到来」と言っています。「不法の人」というのは今私たちが見ている偽キリストのことです。Ⅱテサロニケ2：9-10「9 不法の人の到来は、サタンの働きによるのであって、あらゆる偽りの力、しるし、不思議がそれに伴い、10 また、滅びる人たちに対するあらゆる悪の欺きが行われます。なぜなら、彼らは救われるために真理への愛を受け入れなかったからです。」と、このように記されています。

ですから、偽キリストもそうだったし、にせ預言者もそうです。彼らは人々を惑わして、人々が絶対に、真理に至ることのないように、この救いに与ることが絶対にないようにと誘惑し続けるということです。

ところで、14節に出て来ている「地上に住む人々」とは、これはまだイエス・キリストの救いに与っていない人たちのことです。彼らを惑わし続けていくのです。皆さんよくご存じのように、主イエス・キリストが私たちクリスチャンを迎えに来てくださる空中再臨の後、患難時代が始まるわけですが、患難時代の始まりは、すべて、イエスを信じていない人たちだけです。彼らしかこの地上には残っていません。クリスチャンはみな神のもとに引き上げられてしまうからです。

その患難時代の間には神はあわれみをもって多くの人々を救いへと導かれます。そして、その救いに導かれた人を神はちゃんと守ってくださるのです。「わたしは彼らに永遠のいのちを与えます。彼らは決して滅びることがなく、また、だれもわたしの手から彼らを奪い去るようなことはありません。」と、ヨハネ10：28で教えるように、神はちゃんとクリスチャンたちを守ってくださいます。でも、このような惑わしの働きが、特に、主イエス・キリストの救いを信じていない人たちのうちに働き、彼らが間違いなく救いに与ることなく、サタンとともに永遠の滅びにいくようにと、彼らは誘惑をなし続けるわけです。

3) その目的

この造った偶像、何のためにそれを造るのか？なぜ、にせ預言者は偽りをもって惑わし続けるのか？その目的は全世界の人々が偽キリストを崇拝するためです。13：12b「…また、地と地に住む人々に、致命的な傷の直った最初の獣を拝ませた。」、14b「…剣の傷を受けながらもなお生き返ったあの獣の像を造るように、地上に住む人々に命じた。」、マッカーサー先生はこのように言っています。「このにせ預言者は偽キリストを崇拝する世界的なカルトをリードする存在である。」と。今のこの時代においては、これらのことがいつ起こるか分かりません。近未来のことだとは私たちはよく知っていますが、そのときには、この偽キリストを崇拝するという、そのようなカルトが世界的に力を持ち、そのカルトのリーダーがこのにせ預言者であると言うのです。

C. その計画 14b-18節

このように、地から上がって来る獣の「その正体」と「どんな働きをするのか」を見て来ました。最後にその計画を見ていきましょう。

1. 偶像の製造 14b節

14節の後半に書かれていました。「剣の傷を受けながらもなお生き返ったあの獣の像を造るように、地上に住む人々に命じた。」と。像を造れ！と言うのです。

2. 偶像崇拝の強制

二つ目に彼が考えたことは、偶像崇拝を強制するということです。12節の後半にありました。「また、地と地に住む人々に、致命的な傷の直った最初の獣を拝ませた。」と。

3. 偶像崇拝を拒むものへの迫害 15b節

これが彼の三つ目の計画です。15節の後半を見てください。この獣の像がものを言うことができるようになった後です。「また、その獣の像を拝まない者をみな殺させた。」と書かれています。この像を拝まなければそこには死があるということです。思い出しますね。あのネブカデネザル王が像を造った時の話です。ダニエル書3章に書かれています。ネブカデネザル王が金の像を造りました。高さは約26m、幅2.6m位の巨大な像です。そして、このように言いました。3：10-11「10 王よ。あなたは、『角笛、二管の笛、立琴、三角琴、ハープ、風笛、および、もろもろの楽器の音を聞く者は、すべてひれ伏して金の像を拝め。11 ひれ伏して拝まない者はだれでも、火の燃える炉の中へ投げ込め』と命令されました。」と。拝まなければそこには死があるという、そのような命令を発令したのです。まさに、同じようなことが患難時代の後半にもなされるということです。この偽キリストの像を造らせ、それを拝まない者は首をはねられるということです。これはどのような意味をもっているのか？

4. 偽キリストへの忠誠心 16-18節

このにせ預言者が一番望んでいることは、偶像を造り、偶像を拝むように強制し、拝まなければ首をはねるということです。でも、彼が一番望んでいることは、偽キリストへの忠誠心を持つことなのです。そのことが16-18節に書かれています。

1) 刻印の強制 16節

「また、小さい者にも、大きい者にも、富んでいる者にも、貧しい者にも、自由人にも、奴隷にも、すべての人々にその右の手かその額かに、刻印を受けさせた。」、ここに出て来る「小さい者、大きい者…」、これは地上にいるすべての人々のことを指しています。「小さい者と大きい者」、これは身分を指しています。あらゆる身分の人たちを含むということです。「富んでいる者と貧しい者」、これは財産、富を指しています。あらゆる経済状態にある人たちすべてを含んでいると言います。「自由人と奴隷」、これは社会における状態を指していて、あらゆる社会的状態にある人たちです。すべての人々をこのように表現したのです。

2) 刻印の目的 17節

・刻印の目的は、だれも自由に買ったり売ったりできないため :

では、何のためにこの刻印を押させようとするのか？しかも、人々の右の手か額かに刻印を受けさせようとするのです。その目的は？17節をご覧ください。「また、その刻印、すなわち、あの獣の名、またはその名の数字を持っている者以外は、だれも、買うことも、売ることもできないようにした。」と、このように日本語の聖書は訳していますが、直訳すると「また、だれも買うことも売ることもできないようにする目的で、そして、しるし、すなわち、獣の名もしくはその名の数字を持っていない者は…」と続いていくのです。ですから、この17節は、刻印を押す目的をまず明らかにしています。「だれも、買うことも、売ることもできないように」すると、これが「目的」だとこの箇所は教えます。

レオン・モーリス先生は「刻印の目的は売買の完全な支配である。」と説明します。右手か額にその刻印がなければ物を売ったり買ったりできないからです。今、私たちは自由に売買しています。でも、この患難時代の終わりになると、この刻印がないとスーパーに行っても物が買えない、何か売りたくても売ることができない、このマーク、刻印が必要だということです。それがなければ売買はできないと、大変強い禁止を表わしています。その刻印がないと絶対にできないということです。

・刻印とは？その意味 :

ウィリアム・ヘンドリックセン先生は「刻印を押されたのは家畜ばかりでなく奴隷もそうであった。」と説明します。家畜に刻印を押している姿は皆さんもよく見ます。自分の所有する家畜であると刻印を押します。でも、刻印を押されたのは家畜だけでなく奴隷も押されたと言うのです。何のために？ヘンドリックセン師の説明はこのように続きます。「刻印は奴隷がその主人の所有物であることを表わすしるしであった。程なく、ある人の刻印を受けるという表現は、ある人の所有物になること、その人に仕えること、または、その人を礼拝することを意味することになった。」と。ですから、刻印を受けるということは、その人の所有物になるということ、その人に仕えること、その人を礼拝することになるという意味を持つことばであるということです。

ウィリアム・バークレー先生はこの刻印ということばについてこのような説明を加えています。「刻印は『カリグマ』というギリシャ語ですが、これは幾つかの昔の出来事に由来している。」として、こんな出来事を紹介しています。「商業上の契約を結ぶ場合、カリグマといって皇帝の名前と契約した日を書き入れて判が押され、このローマ帝国の証印が契約の成立したことを証明した。そこで、獣の刻印とは獣を礼拝して獣の法律と権威を受入れた者ということになる。」と。商業上の契約であれば、皇帝の名前と契約を結んだ日を書き入れて判を押してその契約が成立したことになる、今もこれと同じようなことが行なわれています。

しかし、そのことから、獣の刻印を押すということは、獣を礼拝して獣の法律とその権威を受入れた者であることを表すと言うのです。ですから、刻印というと、私たちはそれを押すかどうかを考えるのですが、実は、それにはこう意味があるということです。刻印を押すことが強要される。それはもう神に完全に背を向けて、この偽キリストに忠誠を誓うことです。そういう意味をもっているのです。

・刻印の数字の意味 18節

「ここに知恵がある。思慮ある者はその獣の数字を数えなさい。その数字は人間をさしているからである。その数字は六百六十六である。」、これは、その時代に住んでいる人たちに対して、しっかりと今何が起きているのか、これらは何を意味しているのかを知恵をもって良く考えるようにと勧めているのです。刻印を押すようにと強制されるけれど、よく考えなさい、それがどういう意味をもっているのか？を…

と言うのです。今、皆さんに説明しましたが、まさに、そういう意味があることを良く考えなさいと言うのです。

そして、この「666」という数字の意味を理解しようとする者に対して、これは「人間」を指している数字であると説明されています。実は、非常に面白いのは、この「6」という数字に関して、様々な推測がなされて来ました。この数字にはきつとこういう意味があつて、こういう人物を指しているのではないかと…。ある人たちはこれは「皇帝ネロ」を指していると、「皇帝カリグラ」を指す、いや、これは「ヒットラー」を意味しているとか、この数字からいろんな解釈がなされて来ました。

しかし、一番大切なことは、この数字がだれを指すのかを推測することではありません。ジョン・ワルブード先生は「三つの6という数字は、それぞれが完全数である7に達しないところから、人間を表す数であるという最も簡単な説明が最も良いであろう。」と言っています。つまり、こういうことです。皆さん、「666」ということは、この偽キリストは決して神にはなれないということです。なぜなら、7という数字は完全数であり、神の数だと言われるからです。6は人間の数字です。絶対に、6は7にならないのです。人間は絶対に神にならないのです。「666」と6が3回繰り返されています。思い出してください。「聖なる、聖なる、聖なるかな」と3回繰り返されています。どういう意味があるのか？それは神の絶対的な聖さを強調したのです。

ということは、ここで「666」というのは「人であることを強調」しているのです。この偽キリストはどんなに人々を騙しても、人なのです。どんなに神のように振る舞ったとしても「人なのだ！」。偽キリストは人であつて、決して神になることはないのです。ジョン・ワルブード先生は「この数字がサタンの傑作である最初の獣を指しており、彼が人間の限界から一步も出られず、イエス・キリストの神性にはるかに及ばないことを意味している。」と。彼はキリストではないのです。彼は救い主ではないのです。彼は神ではない、彼はイエス・キリストではないのです。彼は造られた人間に過ぎないのです。嬉しくなりませんか？どんなに人々を騙そうと惑わそうと、偽キリストは偽キリストなのです。神ではなく人なのです。救い主ではなくて人なのです。もちろん、このことは偽キリストだけに限ったものではありません。そのすべてを支配している被造物であるサタンについても同じことが言えます。

サタンがどんなに願おうと、そのためにどんなに努力を為そうと、彼が神になるということは絶対にあり得ないことです。不可能です。サタンはサタンであり被造物なのです。創造主なる神になろうとしたサタンは、その野望を果たすことができないだけでなく、その罪に最もふさわしい永遠のさばき、永遠の地獄へと送られます。サタンは敗北者なのです。私たちの敵であるサタンは敗北するのです。そのことがもう約束されているのです。

もし、この中にまだこの神に背を向けて逆らい続けいる方がおられるなら、あなたのしていることは間違っています。あなたがこのサタンに、また、その手下である偽キリストやにせ預言者に従い続けていくのであれば、あなたもこのサタンと同じところで永遠を過ごすことになってしまいます。悔い改めることです、その罪を。そして、主イエス・キリストの救いを受け入れることです。主はそのときに、あなたを新しく造り変えてくださる。

今日、私たちが見て来たのは、このように偽キリストに続いて登場するにせ預言者のことです。彼らは人々を偽キリスト、サタンに向けようとし、しかし、彼らのどんな努力も神の前には虚しいのです。救いに与っている皆さん、こういうことをみことばは私たちに教えてくれています。私たちにはその真理をしっかりと人々に伝えるという責任があります。こういう時代がやって来る、こういうことが起こるのだということ、そして、それとともに、私たちは与えられたこの日をしっかりと主に会う備えをもって、主の前を正しく歩み続けることです。そして、私たちの愛する家族や友人が、この偽りに惑わされ続けている彼らが、その惑わしから解放されて救いに与ることを願い、その大切なメッセージを語り続けてください。そのようにしてこの一週間を歩んでいきましょう。

《考えましょう》

1. 地から上がってきた獣の正体について説明してください。
2. その獣の働きについて説明してください。
3. 「強制される刻印」について説明してください。
4. 今日学んだことを信仰の友と分かち合い、実践するために祈り合ってください。